

# 戦間期関西学院における「恒久平和」運動について(中)

―神崎驥一、乾精末と国際連盟協会、排日移民法、太平洋問題調査会、軍事教練―

## 井上 琢智

### 目次

#### I はじめに

一 日清・日露戦争時の「反開戦」・「反戦」・「非戦」思想

二 キリスト者の「反開戦」・「反戦」・「非戦」思想

(一) 内村鑑三(一八六一～一九三〇)

(二) 新渡戸稲造(一八六二～一九三三)

(三) 浮田和民(一八五九～一九四六)

(四) 賀川豊彦(一八八八～一九六〇)

II 関西学院戦間期前の平和運動(以上、本誌第二四号掲載)

III 関西学院戦間期における平和運動(以下、本誌第二五号掲載)

一 国際連盟と国際連盟協会

- 二 排日移民法（以上、本誌第二五号掲載）
- 三 日米関係委員会と太平洋問題調査会―洪沢栄一と神崎驥一―\*
- 四 軍事教練反対運動と社会科学研究会
- IV おわりに（以上、本誌第二六号掲載予定）

### III 関西学院戦間期における平和運動

#### 一 国際連盟と国際連盟協会

第一次世界大戦中の一九一八年一月八日、アメリカ合衆国大統領W・ウィルソンは十四条の設立を呼びかけた。この平和原則がドイツに対する講和条約の前提となつて、一九年のパリ講和会議では連盟設立が重要議題の一つとなつたものの、国際連盟の第一回総会が開催されたのは二〇年一月一〇日であった。このような国際連盟設立が模索される一九一八年一月に、早くも河上丈太郎教授<sup>35)</sup>は、顧問となつた弁論部の姫路・明石方面の巡回講演で「国際連盟に就いて」を講演し「聴衆を陶醉された」し、一九年七月三日には普通学部卒業生で早稲田大学教授であった永井柳太郎は「世界平和に対する所感」を講演した<sup>36)</sup>。また、一九一八年九月から関西学院高等学部で雇用されていたラトヴィア人の英語教師イアン・オズリンは、一九一九年の講義「Twelve Lectures on the Meaning and Value of Life: Literary Expressions of the Ethical Problems of Epicureanism, Stoicism, Mysticism, an Activism, or Idealism」<sup>37)</sup>の最

終講義で「国際連盟」を取り上げた。

一九一九年を「新時代の記念すべき最初の年」と高く評価するオゾリンは、「実践主義、精神的理想―美、善意、真実に對する忠誠」をその哲学とする「国際連盟」が創設され、それにより「疑惑、不満、不安、悲觀主義の陰鬱な夜」が過ぎ去り、「精神的な価値と信頼を見事に回復した」からであるという。そこでは「偉大な劇作家」イブセン、「静寂主義」者トルストイ、「偉大な作曲家」ワーグナー、イタリアの「ロマンティックな不安と静寂な憧れの偉大な詩人」レオパルディ、イタリアの「快樂主義」者ダンヌンツィオは「気が抜けた」「夜明け前の時代」の寵児だと否定された。なぜなら。彼らからは「新しい未来を築くインスピレーション」を得られないからであるという。

この「人類がいまだかつて見たことのない輝かしい未来」は、「ウイルソン大統領の素晴らしく立派な信念を源」とし、「良心の世界と民主主義の世界」という価値の「最初の実体」である「世界共和国『the Public of the World』」が今や「<sup>38</sup>具体的に現実味をおびてきた」という。この「新しい人類を賛美することができるのは「詩人のみ」であると考えるオゾリンは、古くは、「アメリカ民主主義の詩人ウォルト・ホイットマン」が *Leaves of Grass* (1855) <sup>39</sup> のなかで陳べた「わたしには見える。『自由』が、完全に武装し、勝利をかちとり、一方には『法』を、他方には「平和」を伴って昂然と進むさま」という詩句を取り上げ、「自由」と「法」と「平和」が結束し、「身分制度の理念に抗して」「『民衆』がおのれ自身の境界標を建て始めているさまが見える」と予言したという。オゾリンは、「この予言が成し遂げられ、それ以上のことが起こったか」と自問自答し、応える。「彼が初めて書き下ろした時には、かすかな眩きにしか聞こえ

なかった。「囁き」は、今や「現に見たまえ、独裁者が身震いし、王冠の光が陰り始めた大地は不安げな新しい時代」なっているのではないかと指摘する。

これは、『鎖を解かれたプロメテウス』のなかで、「世界革新、幸せな地球、天国の實在、兄弟愛によつてすべての人がひとつの人類となる新たなエデンの園を願う」P・B・シェリーに対して、「賢明なる文学の諸先生方」は「詩人の夢！ ユートピア。夢見る空想家」と批判したという。「新しい人類を賛美する」ことができるのは「詩人のみ」だと考えるオズリンにとつて、ホイットマンやシェリーだけでなく、スコットランドの国民的詩人でアメリカ独立戦争の精神に共感していたR・バーンズが「何と言われようとも、／世界中どこでも、人と人が／何と言つても兄弟となる日が／何と言つても近づきつつあるのだから」と新しい時代の到来を期待し、また、一七八九年のフランス革命について、「精神的な時代、それを理解しよう！ 偉大な愛の時代！」と叫び、そのような時代の到来に「時まさに、ヨーロッパ全土が歓喜にわきたち、／フランスは幸福の絶頂にあり、人間は／生まれかわるかのように見えた時期だったのだ」とW・ワーズワースが謳った時代は、「国際連盟」が創設されようとする「今の時代」にも「非常に適切：にも当てはまる」と。

さらにオズリンは続けて訴える。「このもつとも尊い夢にいかなる名称、「例えば」世界合州国、人類議会、世界連邦、'Federation of the world'、国権連盟、'a League for National Right'、『国際連盟』を与えるかどうかは問題ではない」と指摘するが、それは「このビジョンは途方もなく大きく、この理想は大変美しい。「それゆえに」…誰も無視することができないし、この理想は偉大過ぎて理解しがたく、想像を絶する。それはどのような強力な議会から生まれるのだ

ろうかと考えても無駄なことだ。いや、それは文明史における最高点、社会のもっとも進化した姿、永遠の世界に向かう哲学的思索のもっとも大胆な飛行」であり、「もっとも偉大な天才にとっても十分に大きく、もっとも哀れな人にとっても十分に有望な目的」であり、「このもっとも神聖な運動は、生涯を捧げるのに実に相応しい。それは何よりの特権、何にも勝る特権である。さらに、それを理解している人にとって、最重要な義務であると付け加えよう」。「民主主義の世界をつくることは、社会的思考、政治的思考の基本原理を知る誰もが緊急に取り組むべきことである。さらに、この緊急課題が『国際連盟』となる。『権利と正義の世界を作ること』は倫理的、宗教的改革者の緊急課題である。これも同様に『国際連盟』になる。『精神的理想世界をつくる』良き意志、協力、信頼、愛、徳、真実、美は高貴な行動主義のまさに基本である」と。

「過去四年間「一九一四—一八」の恐怖「第一次世界大戦」を生き抜き、一九一四年八月の記念すべき日以前の『昨日』の、取るに足らない利己的で無力な絶望(ビクトル・ユゴーが *mal du siècle* : 「厭世」と呼んだ)をなおも記憶する人びとは、『理想が実現する』であろう世界を求めている」と。さらに念を押すかのように、ウィルソン大統領の二月—四日の演説を引用して、「互いを疑っていた人びとは、今や一つの家族のなかで友や仲間として生きることができ、そうすることを望んでいる。不信や陰謀の毒気はきれいに取り除かれている、と。人びとは目と目を合わせよう語る。私たちは兄弟で、同じ目的を持っている。昔はわからなかったが、今はそれができる。これが私たちの友情の政府だ」。これらの言葉は、黙示録カイザヤ書の予言のように響くかも知れないが、偉大なる現代を冷静に映している。地球中を駆け巡る電報と無線電報、新聞はそれらを文字にした。詩的な夢は生きた現実へと取ってかわる」と。

オゾリンは、学生にむかつて次のように訴える。

「世界の歴史の中で、この瞬間を生きることは、特別な幸運だと若者は考えるべきだ。なぜなら、この若者は新しい世界を築く特別招待を受けているのだから」。

「心のなかの希望により近づけて再建しよう！ 諸君、今も酔いしれ続けている快樂主義者に気をつけなさい。そうすれば、それよりはるかに大きな幸福に君たちは気づくであろう！ 静寂主義の福音に気をつけなさい。そうすれば、哲学的に衰弱する以上に尊い休息に君たちは気づくであろう。君たちが世界を築くのだ。行動しなければならぬ。そのようなもつとも古い仕事にあつて、もつとも古い詩は、ブラウンングやイプセンなどの最新版と同じく、君たちにとってまさに素晴らしい言葉となるであろう。そのなかでも『雅歌』を書いた名もなき作者による春の歌以上に優れたものはない。今月、私は桜や桃の花びらが開くのを目にしたので、古い詩に込められた象徴を読み取るのと同じように、このもつとも美しい季節を伝える香しさのなかからより深い意味を読み取らざるを得なかった」と。

最後に、オゾリンは旧約聖書の「雅歌」を読み上げる。

恋人よ、美しいひとよ さあ、立って出ておいで。／ごらん、冬は去り、雨の季節は終わった。／花は地に咲きいで、小鳥の歌うときが来た。

「実に博識で、輝かしい知性の持ち主」で、「邪気、いつもムキになって学生と喧嘩し、…昼食はいつも学生食堂で学生と一緒に並んで味噌汁や漬物をも食べ…日本箸をうまく扱い」、「下

イツなまりの英語」で熱く学生に訴えるオゾリンのこの訴えは、学生の国際連連盟への関心を否が応でも引き、運動へと駆り立てたであろう。

この国際連盟の活動を支えるために世界各地で結成された民間の国際団体である日本国際連盟協会は、「熱心な平和主義者」であった渋沢栄一を会長に日本でも一九二〇年四月二三日に結成され、各地に種々の支部が生まれた。大学の学生支部は、一九二四年二月の早稲田大学に最初に生まれ、同年東京帝国大学、慶應義塾大学、明治大学と続いた。<sup>(41)</sup>

一九二二年一月二日のワシントン会議で採り上げられた「建造中の主力艦の廃棄・保有比率の設定」とする軍縮案について、はやくも同月三〇日に関西学院は「中学部を除ける全学院教職員学生等」の参加のもと、この「軍縮運動」に賛同する決議をした。すなわち、「決議 神戸関西学院専門部教職員及学生ハ世界恒久平和ノタメ、列国軍備ノ縮小ヲ希望ス」と宣言し、その意義について「折柄ワシントンに於て開催されれるる万国平和會議に電送せられたりき。学院の世界の恒久平和を切望するの精神期せずして国際連盟の精神と一致する処」であると書き、これは「実に偶然に非ずと云ふべし」とさえ考えていた。

関西学院支部設立の契機<sup>(42)</sup>となったのは「大正二三年初春田川大吉郎氏、青木節一氏」の来校であった。彼らは「支部設立の希望を述べ」、それに応じて「松本「益吉」副院長の主唱により生まれ」た。その年の一〇月一六日、関西学院は学院創立三五周年記念式を迎えた。その記念講演会で、同窓の二人、憲政会の議員で外務参与官永井柳太郎は「近代外交の真相」<sup>(43)</sup>を講演し、「学生国際連盟協合理事にして最近『太平洋問題』」*The Unsolved Problem of the Pacific*、<sup>(44)</sup>「1924」の「東京帝国大学」法学博士になった「乾精末は、<sup>(45)</sup>「前加州大学教授」の肩書き<sup>(46)</sup>で「国

際連盟と日本」を講演した。

この年の十一月三日、国際連盟協会神戸支部の発会式が神戸山手の海運倶楽部で開催され、奥村青年会主事より設立経過が説明された。この発会式には小寺謙吉、金子直吉らが、関西学院からは松本益吉や田村市郎が出席し、法学博士岡実が「人種平等問題」と題して講演し、「国際連盟の力に俟つ外解決実現の道なし」と主張し、外務書記官芦田均が「我が国の現状と連盟思想」と題して講演し「明治維新当時の雄大にして：賛美すべき国民精神の再興を：行詰れる局面の展開は之を外にして求められずとなし而して之実に吾人の国際連盟の趣意精神なり」と主張、法学博士林毅陸は「新時代と国際連盟」と題して、「連盟は平和を目的とし、平和は列国の通商貿易を増大：日本第一の貿易港なる神戸に於て連盟の趣意精神に賛同共鳴する人の多き偶然にあらず」と主張した。<sup>(47)</sup>

一月一八日になると関西学院では、その「支部は姉崎正治博士を迎へて中央講堂に於て精細なる発会式を挙行した。初代支部長に松本「益吉」：が当たられる事になつた」。<sup>(48)</sup>同年十二月、国際連盟関西学院学生支部第一回支部総会が開催され、顧問は吉岡美国名誉院長、神崎驥一、畑歎三、左海猪平の四人であった。<sup>(49)</sup>

一九二五年一月二九日になると「昨年一月には七年間の国際連盟創成の大事業を終へて一時帰朝された連盟事務局次長新渡戸稲造博士を聘して一大講演会」が開催された。<sup>(50)</sup>博士は「国際心」というタイトルで「博学非凡の知識を傾聴」「満堂の聴衆に多大の感銘を与へた」。このように「支部は盛んなる活動を開始し、世界平和の速やかに実現せらるゝに到らんがため。力を致しつゝ、あり」。<sup>(51)</sup>「学院の如き国際的ミッシヨン・スクールが率先して同問題の円満なる解決

に資する処がなくてはならない。学院の使命も亦その国際的特色を發展助長せしめて、世界の平和と人類の協力に貢献する所に一に掛つて存する、此の使命を意識して生くるか否かと云ふ事が将来の学院の盛衰に甚大なる影響を與へる事である<sup>(52)</sup>」。

また、五月二五日には来神中の慶應義塾大学第六代塾長の林毅陸を招いて「国際正義と社会主義」と題した講演を依頼した<sup>(53)</sup>。

同年一〇月二四日には、国際連盟学生支部関西連合発会式が大阪実業会館で開催された。本部からは、法学博士でカリフォルニアの排日土地法について発言していた山田三良が出席した。参加校は同志社、関西大学、関西学院、京都帝国大学、神戸高商、古屋女子英語学校・神戸女学院・大阪外大の八校であり、神崎驥一が「太平洋問題と日本の位置」と題して講演した<sup>(54)</sup>。

このように国際連盟協会関西学院支部が船出した矢先の一九二五年一月一七日、松本益吉は昇天した。「国際連盟協会、日米協会等の幹部として、国際間の親善のために尽力する処最も多<sup>(55)</sup>」かった松本は「真の基督者は真の憂国の志士」であり、「世界的理想主義に立」ち「衷心より世界人類の恒久平和の到来を祈」ったが、この「国際連盟「関西学院」支部に対する熱心或支持も此の精神の表れ」であつた<sup>(56)</sup>。松本の昇天にともない、同連盟協会関西学院支部部長は神崎に交代した<sup>(57)</sup>。

一九二五年には後述するように軍事教育反対運動や京大事件もあつてほとんど活動できなかったが、二六年になると、関西学院支部は院内講演会を再開した。具体的には、青木節一(四月、九月)、安間徳勝、法学博士で早稲田大学教授で日本国際連盟協会機関誌への投稿者でもあつた信夫淳平<sup>(58)</sup>(五月)、連盟協会の山川端夫や明治学院総理田川大吉郎(十一月)が講師であつた。

さらに、五月になると関西学院では学生による院内弁論大会開催が開催され、森田和四郎が「移民問題」を、十河巖が「国際資本主義の進展と国際連盟」を論じた。<sup>(59)</sup>

また、関西連合会は六月に「関税障壁撤廃問題」の討論会を、一月二三日には国際連盟模擬総会が「人口問題」のテーマのもとで、開催された。学内研究会の興味の焦点はR・ニコラウス・栄次郎・クーデンホーフ・カレルギーが唱えた「汎ヨーロッパ主義」や国際経済会議の大問題である「関税問題」<sup>(61)</sup>であった。

また、神崎驥一は五月に日本国際連盟協会の機関誌『国際知識』で「太平洋問題と国際連盟」◇…連盟は欧州連盟たるべからず…◇を掲載した。その中で、自らを「全世界、全人類の永久平和を目的」とする「国際連盟支持者の一人」だと公言し、現時点では国際連盟が「処理せなければならぬ事件が欧州に一番多い」が、「世界将来の平和の為に国際連盟が太平洋問題に対してもつと積極的な態度を取つてもらいたい」と「痛切に望む」と指摘する。そして、自らも出席した「太平洋関係研究会」「太平洋問題調査会」が扱う太平洋の諸課題を詳細に紹介し、その会議は「全然民間的な非公式会議であつた」が、参加八ヶ国中「中心的地位を占めたのは日米両国」であり、日本は「有色民族を代表する意味に於て日本代表の立論は頗る積極的で正々堂々たるものがあつた」とし、その代表例として「移民問題」を挙げ、「日本は正義人道の根本精神に立脚して米国の現存移民法に忌憚なき痛撃を加えた」。確かに「現代に於ては軍備の実力」は無視できないものの「思想言論の威力が益々増大しつつある」現在では、「国際連盟は思想言論の威力と人間の正義公正の觀念に信頼して、武力以外の方法より世界平和と進歩を計らんとする人類の大経論」であり、「太平洋諸国民共通の利益を目的とする人道

的見地に立脚」したものであったために、参加国の「何等の反感なく却つて尊敬を以て迎えられる」という。神崎は「余は必ずしも軍備廃止論者に非ざるも、武力により太平洋の平和を確保すると夢想するものとは到底意見を同うし能はない」とし、平和を確保するためには、「国民全体の総合的勢力」としての「近代的精神の上立てる思想言論の力」の重要性を主張した。

このように考える神崎は、国際連盟は太平洋調査会議開催の動因であったアメリカの移民法通過に対して「道徳的インフルエンスをすら用ひて居ない」し、「全然没交渉」であったと指摘し、その原因は「米国の三大団体である労働同盟、教会同盟並に婦人団体」が同法に賛同したためであり、神崎は「参加すると思つて米国を去つた」にもかかわらず、「露骨に云へば：米国が連盟に加入していない」と批判した。「米国によく主唱された」軍縮会議に英国や日本が参加したにもかかわらずであると。このような米国の姿勢に対して神崎は「自分は所謂民衆政治なるもの、頼りなさに失望し、米国民に対して従来『新世界』に神崎が論文を公表した一九一七年」有していた尊敬と信頼は尠からず減退した」と述べ、「彼等は人類共通の問題を犠牲として、自国政党政争の問題『モンロー主義、一八二三年一月』となした人類に対する責任を後世に負はねばならん」とアメリカを強く批判した。そして最後に「日本の責任区域」である「有色人種が大部分を占むる太平洋は、其の先進国である日本が率先して骨を折る責任」があり、「人口及人種問題の解決には有色民族の解放が必要」であり、そのためには「国際連盟の精神と勢力を太平洋に引込むことは更に大切である」と結論を下した。<sup>(82)</sup>

一九二七年一月二三日には、京都商業会議所で国際連盟模擬総会が開催され「人口問題」

が扱われた。

一九二八年五月三日には、同窓で前カルフォルニア大学教授で滞米中は『シルヴァ・タンク [silver tongue-雄弁]』と呼ばれた乾精末が講演し、感動した学生が多く関西学院支部へ入部した。また、六月一日には、石井菊次郎との懇談会を神戸の三支部と共催した。さらに一月二五には、信夫淳平博士特別講演会を関西連合会の主催で開催した。<sup>(63)</sup>

一九二九年六月五日には、学内でも実施されていた「懸賞論文」募集<sup>(64)</sup>と並行して実施されていた国際連盟協会本部の懸賞論文で「全国学生支部中、学院最高当選率を上げ」<sup>(65)</sup>快挙であった。この年に京都で開催されていた「太平洋会議」(第三回)にはベーツ院長はカナダ代表として出席し、オブザーバーとして出席していた国際連盟事務局東京支局長青木節一を一〇月三十一日には合同チャペルに招いて「太平洋問題と連盟」と題する講演会を開催し、十一月一日の平和記念日には、神崎驥一支部長が平和について、太平洋会議に出席したベーツ院長が太平洋問題に関する記念講演をした。また、関西学院国際連盟支部は、同月二三日には関西連合会大研究会を関西学院で開催した。そのテーマは「国際平和維持に国際軍備を必要とするや否や」であった。「吾人は国際平和を」「現状維持を目的とする国際間の平和として理解し、此の意味に於ける国際紛争解決の平和的処理方法に依り得ざる時のみ国際軍備の必要を認む」との決議について、関西学院の和氣六郎は「国際紛争は平和的に解決すべきであつて軍備を必要としない」と論じたが、京都帝国大学の学生は「之の方法に依り得ない場合のみ軍備によるべきである」と主張し譲らなかつたため、結局採択されなかつた。まさに、内村鑑三流の絶対的平和論主義と相対的平和主義との対立であった。このように国際連盟関西学院支部は積極的に国際

的な平和運動に参加し、日本国際連盟協会、太平洋会議、太平洋問題調査会と歩調を合わせて、対外的には日本の国際連盟脱退問題が浮上し、国内的には学生運動への政府等による弾圧という暗雲が垂れ込めるなか「国際平和」に取り組んでいた。<sup>(66)</sup>

一九三二年五月刊行の『恒平』にベーツは“The Condition of Peace”<sup>(67)</sup>を掲載した。一九二九年に京都で開催された第三回太平洋会議にカナダ代表として出席していたベーツは、冒頭で「戦争でなく平和は、ヒューマニテイの理想的状态と同様、進歩と繁栄にとって通常かつ必要な条件であるということがますます明らかになって」おり、「恒久平和 [permanent peace] を望むためには」「どのような国であっても一国だけでは困難」で、「国際的な協力によってのみ可能」であり、「国民国家の精神は、もはや独立ではなく、相互依存である」と指摘し、「自国だけでなく、やっていけそうになっているアメリカ」ですら、他国に依存しており、その点ではソビエト、カナダ、イギリス、ヨーロッパ諸国も同じであり、日本もまた同様であると指摘する。さらに「繁栄の維持と進歩の保障のためには、国際平和が必須条件である」と。その「平和の基本的条件」は「国家間の相互の尊敬」であり、「要するに、国家間の社会関係に相応しい、人生と同じような黄金律が、国際関係にも当てはまる」として、以下の言葉を学生に最後に贈った。「Japan of Japanese is too small, but Japan of humanity is immense.”<sup>(68)</sup>

また、神崎驥一は「国際連盟脱退是非論」<sup>(69)</sup>を同誌同号に掲載した。

一九三二年三月一日、満州国は建国宣言をしたが、三三年二月一三日になって国際連盟は対日非難決議を上程し、陸軍省は国際連盟脱退にすでに言及し、二月一六日、日本政府も満州撤退勧告案に反対し、二四日、国際連盟の会議で松岡洋右は退席、三月二七日になって国際連盟

脱退を決めた。このように事態が進行するなかでの論考であった。

この事態について、神崎は「欧州関係」にしか関心のなかつた「国際連盟としては初めて重大なる東洋問題を取扱ふ事」となったが、それが「日本の生命線」の満州問題であつたため、それまで「比較的無関心」であつた「日本国民の注意」が国際連盟に向かつており、「未だ一部に限られ居るとは言へ」「連盟脱退論」が台頭してきたとの現状を踏まえ、この連盟脱退問題については「大いに考慮を要する」必要があると指摘する。「欧州の問題の処理に傾き過ぎた」と国際連盟を批判していた神崎は、東洋の問題に関心を示し始めた国際連盟の姿勢転換を「歓迎したもの」の、その国際連盟が「抽象論或は形式論に依つて処置なさんとした傾向」にあることを指摘し、それによって逆に「平和理想主義者が反つて、実際的には却つて平和の攪乱者となる」ことを危惧し、現在のように「日本の輿論には或程度迄は正義の観念が支配して居る」間に「連盟としては充分考慮すべき」であり、「日本としても充分静慮しなければならぬ」と要請した。

そのうえで、連盟に加盟しなかつたアメリカに加えて「産婆役」で「常任理事国」の日本までもが脱退すれば、「連盟は亜細亜を失【い】…殆んど欧羅巴の国際連盟となる惧れ」があり、さらに「アメリカ、欧州連盟に対して有色人種意識に依つて連結せられる亜細亜同盟形成の観念が具体的に達成し兼ねないとも保証は出来ない」として、その後現実に生まれた「大東亜共栄圏」構想を危惧した。このように考える神崎は、日本の国際連盟脱退は「世界に大きな波紋を引起す原因とならないとは決して云ひ得ない」ことを恐れ、「我が国の国際的地位の重大性に鑑み脱退是非に就ては最も慎重なる判断をなすべきもの」だと、脱退に反対した。

さらに、同誌同号に副支部長原田脩一は「国際連盟と学生運動」<sup>(69)</sup>を掲載した。そこで原田は「平和を主張してゐた言論機関も今日では完全に軍事思想の宣伝、鼓吹者となつてゐるし、宗教団体特に人類愛を其の基調とする基督教すらも此の問題に対しては何等批判的態度を示してゐない。或は示し得ないといった方が適當」であり、「右翼のテロイズムの横行は、一般の言論の自由を奪ひ、自由批判によりて生まれたる輿論求め得ざるが如き有様」であると批判した。それにもかかわらず「支那事変は事変として片付かず、更に大任掛けな、国民経済を破局に導く可能性のある戦争に終」わらなかつたのは、おそらくリットン報告をも念頭に入れながら「外部に於て批判し、制約し且つ調停し得る機関」である国際連盟の存在があるからだといふ国際連盟を評価した。ただ、今も「国際連盟の仕事は只単に消極的、一時的対策たるにとゞま」つており、それ以上に「積極的に国際平和を招来するためには更に一步を進めて他の手段」すなわち「国際連盟が、国際平和に関する教育運動に更に積極的支持を与へ、思想的背景に根本的革新を期する必要がある」と指摘し、国際連盟規約の改正よりも「はやくより青少年に平和の思想を注入し彼等に理論的平和にあらずして平和に対する好愛心を植へ付ける事が国際連盟今後の一大事業」であり、その点で「国際連盟学生支部存在の意義が十分に認められ更に一層の支持が与へられなければならぬ」とし、その教育は「中学校、女学校乃至小学校程度まで及ぶべきである」と結論した。

ただ、その一方で、原田も指摘しているように、この年に関西学院支部が開催した「名士講演会」では大阪朝日新聞の大江素天を招き「満蒙新国家に就いて」を、さらに京都帝国大学作田莊一経済学部長は「世界経済上より見たる満州問題」を、本部から派遣された芦田均法学博

士は「自由通商と連盟精神」を講演するなど、平和運動に逆行する動きも起こりつつあった。<sup>(10)</sup>

同年三月一日、国際連盟支那調査団のV・A・G・R・リットンが来神し、七月一七日には神戸を離れた。一月六日になって、その「リットン委員会報告書」に「批判的」な模擬連盟総会開催を主張した京都帝国大学支部部案に対して、「国際外交関係の急迫と我国社会情勢の緊張」を理由に関西学院支部はその開催に反対した。採決の結果、京都帝大案が承認された。しかし、一月二七日開催の第三回準備委員会において、共催の大阪毎日側から本総会を公開にするのであれば、「日本の主張に反対なる意見は全部賛成に変更するか、賛成者のみの演説を許すかでないければ、警察が許可しないであろうし、：国策上甚だ不利であるから大問題を起す恐れがある」との注意があったため、あくまでも関西学院側は、その報告書についての「反対演説は之を外国新聞から得て翻譯したる旨を明言して之を朗読すべき」だと大毎に反論した。それにもかかわらず、後日、大阪毎日を通じて警察から開催不許可との連絡があり、最終的に翌一九三三年一月二二日に中止が決定された。公開討論会・演説会での言論弾圧がすこしずつ忍び寄ってきた。この間、乾が上海より帰神し、本会に所属する学生二名が九月一日に会談している。<sup>(11)</sup>

日本の国際連盟脱退が遡上に上り、国際連盟の対日非難決議の直前の一九三三年一月二八日の日付で、関西学院学生支部はジュネーブの松岡代表宛に以下のような「感謝と激励の文書を送った。

「謹白／極東の平和延いては世界平和の確立と正しき世界輿論の喚起の爲め、日本の公正なる主張開陳に寧日なき閣下の御苦勞を拝察し、我々は誠に感謝に堪へない次第であります。／

正しい国際情勢の把握と世界平和を翹望<sup>きょうぼう</sup>して止まない我々学徒は、此の国際情勢の推移に深甚なる注意を払つてゐるものでありますが、現下の世界輿論の動向と我国の立場に想致します時、將に山雨到らんとして風樓に満つるの気を感じ、其の成行をひそかに憂慮してゐるものであります。今や旬日を出でずして、連盟総会を迎へんとするに当り、遙かに閣下の御健康を祈り、世界の啓蒙と公正なる我主張貫徹のため御奮闘を切に御願ひする次第であります。／昭和八年一月二十八日敬具／国際連盟協会関西学院学生支部／支部長 神崎驥一／松岡洋右閣下<sup>(76)</sup>。

この年の六月一日、「国際連盟協会関西学院学生支部」は「日本国際協会関西学院学生支部」と変更した<sup>(77)</sup>。それは三月二十七日の日本の国際連盟脱退の影響であり、日本国際連盟協会が「日本国際協会」と改称されたためであったのはもちろんである。まさに国際連盟関西学院学生支部創部一〇年目の節目の年であった<sup>(78)</sup>。

しかし、このような状況の変化にもかかわらず、日本国際協会は「その活動にほとんど変化なく、また国際連盟協会世界連合から脱退することもなかった。学生支部、地方支部の活動は相変わらず活発であったし、一九三五年には太平洋問題調査会を合併し、翌三六年には外交問題研究の特別調査部が設けられるなど国際問題の研究、普及に努めていた」<sup>(79)</sup>。

最後に、国際連盟関西学院支部の機関誌について言及しよう。関西学院支部は創部三年にして、一九二七年一月に「西洋紙一枚」の機関紙『連盟ニュース』を、同月二六日第二号を発行した。さらに昭和「二年度頭尾」「三年度年頭」に『部報』第一号を発行して後、一九二七年六月二三日に死去した神崎驥一の息子「恒平」を記念して『恒平』と改題し、継続出版した<sup>(80)</sup>。さらに、二九年初めには機関誌『国際平和』の第一号を刊行している<sup>(81)</sup>。しかし、一九三八

年の『恒平』十一号は、商経学部の吉田斉明による「日支事変の世界史的意義」の掲載によって発禁処分を受けた。<sup>(78)</sup>

## 二 排日移民法

一九〇三年一月に渡米した神崎驥一は、バークレー市で先輩の畑敏三と同宿し、カリフォルニア大学<sup>(79)</sup>・大学院で経済学・政治学・史学を学び、農業経営に従事し（一九一一年一月―一三年十二月）、在米日本人会（Japanese Association of American）書記長を務めた（一九一五年二月―二年四月）<sup>(80)</sup>。

この時期は、そのカリフォルニア州で排日運動が展開された時期でもあった。その契機となったのが一九〇六年のサンフランシスコ学童隔離事件であり、一九〇七年十一月から翌年三月までの間に林董外務大臣とT・J・オブライエン駐日アメリカ大使は一通の書簡を交換し、日本が渡米の自主規制することと引き換えに、アメリカ政府は排華移民法のような差別的な日本人排斥を目的とする移民法を成立させないことを約束したいわゆる「日米紳士協定」という行政協定を未公開のまま結んだ。それにもかかわらず、一九一三年五月になるとカリフォルニア州政府は州法として第一次排日土地法を可決し、さらに第二次排日土地法を一九二〇年一月に可決し、一二月に実施した。その流れのなかで、一九二四年になるとアメリカ議会は排日条項を含む新移民法を可決し、実施された時期でもあった。<sup>(81)</sup>この排日移民法は日米関係に影を落とした。

一九一四年一月、江原素六<sup>(82)</sup>は立憲政友会を代表し、第一次外国人土地所有禁止法案可決への

抗議のために渡米した。カリフォルニアの関西学院同窓会は、その江原とT・H・ヘーデン博士歓迎のものであった。同窓会には太田義三郎、畑敏三、神崎驥一、中村賢二郎、家城秀夫が参加していた。<sup>(83)</sup>

一九一七年四月一二日、在米日本人会書記長神崎驥一は、『新世界』(七七九五号)掲載論文「千載一遇の好機会を活用せよ(未完)」<sup>(84)</sup>で以下のように主張した。「排日思想の発端は支那人排斥運動の余沫<sup>よまつ</sup>受けた者<sup>ママ</sup>」あり、一九〇〇年五月職工同盟主催の市民大会での日本人排斥演説を受けて、翌年一月の州議会でのH・T・ゲイジ知事の最後の教書でも「支那人労働者の入国により蒙る危険と日本人労働者の入国により蒙むる危険は同一性の者<sup>ママ</sup>なる故一を排斥せし米国は他をも同じく拒絶して危険を未然に防ぐべし」とアメリカ人労働者と州知事の主張を要約した。それに対して、神崎によれば、このアメリカの労働者認識は誤認であり、今や支那人とは異なり「日本人労働者が必ずしも低級労働者で無い事」、「日本人労働者を疎外する事の不利益又彼等と徒<sup>いたづら</sup>に排斥迫害する事の不道理不道なる事」がアメリカ労働者の「首領先輩」には認識されるようになったと指摘する。それにもかかわらず「ベーツ博士が過日忌憚なく云へるが如く世界は日本に對し著しく猜疑の眼を注いでをる<sup>(85)</sup>」と述べたのを受けて、神崎は「恐怖の中に親善無く、猜疑の中に提携なし」と主張した。ただ、「米国は輿論の国即ち民主政治の国」であるがゆえに「多数民衆の誤解を解き相互の了解を根本的に徹底せしむる事は日米問題解決の要義と信ずる余の所謂相互の了解とは唯表面的の者<sup>ママ</sup>にあらずして両国の思想及経験上の根本に触る、者<sup>ママ</sup>」でなければならぬとも神崎は主張した。

さらに、一九一九年一月一日の「日米新年号」掲載論文「大正八年の問題と事業」<sup>(86)</sup>で神崎

は以下のように主張した。昨年「米国の輿論大勢が在米同胞に対し著るしく良好なる方向に変調しつゝ、あるは「喜ぶべき事」としながらも、「年末に到り「第一次世界大戦」休戦と共に平和の燭光明となり米国は戦後再建の為に新活動を試みんとし又戦争の為促進せられたる国民統一思想の実現を期し米化運動頗る強烈ならんとせる」点を採り上げ、この「米化問題」が運動の時代より政治の時代に移らんとせる」と指摘した。その例に神崎はカリフォルニア州の「外国人英語教習案」やハワイにおける「日本人学校の廃止」案を挙げ、「本運動を積極的に遂行する事は米国の現状最も必要な事なるも」と認めながらも、「余りに狭隘にして機械的又形式的に陥る」のは、アメリカが「各国の国民民族が集合して居る」以上、「国家の健全なる発展に必ずしも有益でない」と主張した。というのは、「諸国民の背後にある文明其他特徴美点を包容強化し其發揮を助長せしむる事は米国の進歩に多大に貢献をなす」と主張し、「人間に自由を與ふることは米国建国の精神にして」、「此精神を破壊することは大なる損失である」と神崎は結論を下した。

しかし、同年九月一日の『太陽』（第二五卷第一一號）掲載論文「日米関係の新現象」加州に於ける排日運動再燃の意義<sup>57</sup>」では、「最近の加州における排日運動は一九一三年の土地法案通過により頂上に達せる従来の排斥運動と同質のものに非ず、種々なる異なる特徴を存し、日本将来の新聞係を指示する前兆的現象なり」とし、「加州排日の中心地に在」った経験からすると「日露戦争を一転換期として根底的に醗酵せられたる加州の排日態度は最近数年漸次に緩和」しただけでなく、一九一五年のパナマ運河開通ならびに太平洋発見四〇〇周年を記念したサンフランシスコ万国博覧会への参加や「更に大戦以後は一層良好なる緩和」

殊に顯著なるは、労働党の態度を、「変」したためであり、「排日中止の根本理由ハ此の大戦」時、「打算に敏捷なる米国人は、大戦中日本に対して敵意を表するのは不利なると：一時牙を潜めた」に過ぎなかつた。だからこそ、パリ講和会議で日本が三国干渉で返還した山東半島の還付を求め、要求が認められなければ国際連盟規約調印見合わせするなど「日支關係に俄に緊張するに及び米国の対日輿論は一時大變動を生じ、全国の新聞紙は筆を揃えて日本の対支政策を攻撃し初めたり」との認識を神崎は示した。加えて、日本政府が国際連盟規約委員会へ人種的差別待遇撤廢を提案したとの「風評」<sup>(88)</sup>によって、「沿岸諸州民の神経は著しく興奮の状態を示し、該法案に潜める日本政府の目的に不安猜疑の念を生じ、同案を以て労働者自由入国の前提ならんとの推測」を生んだ。というのは神崎によれば、沿岸諸州民はこの問題を「人種的偏見に非ず經濟問題」と理解しているからであつた。

このように理解する神崎にとって「移民問題を中心とせる過去の運動は漸く沈静し：政争の具となるや：米國政界を動かし、：日本に対する米國輿論の背景を無視して判断し能はざるなり」と言わざを得なかつた。まさに「根柢的病因は蓋し人種的偏見、日本國民に対する恐怖不信、日本國策に対する不安危惧、及び国力發展により生ずる利害の矛盾衝突に在り」。その解決策として、「米國は輿論政治國にして多数民衆の聲は最後の審判者なり」と信ずる神崎にとって「近時西部の急速なる發展に連れ、政治上、社会上並に經濟上に於ける勢力甚だ侮り難きものあり、殊に東洋就中日本及支那關係諸問題に付ては、西部は却つて米國輿論支配の実権を握らんとす」。現状を踏まえ、日本政府はこれまで東部を重視してきたが、「将来日米親善の途を講ぜんには、東部輿論万能の迷信妄想を打破し、

西部輿論の實力を認識し、進んで之を良導啓発するの策を立てずんばあるべからず」と結んだ。このような滞米時代に在米日本人会書記長としての神崎驥一らの諸活動が、当初アメリカの Y M C A 主導で行われ、洪沢栄一が支援した日米関係委員会や太平洋問題調査会への関わりを産み、その創立の準備をサポートする一人として、一九一九年、神崎は二度目の一時帰国を果たし、母校関西学院を訪問した。<sup>(89)</sup>その後、三度目の帰国をはたし、二二年三月二八日、神崎驥一は高等商業学部長に就任し、学部改革に専念し、以下に指摘するように、日米関係委員会や太平洋問題調査会の活動とも深く関与した。

そのなかで、すでに一九一四年には「関西学院は：「移民法改正」阻止の任に当たるべき責務あるを感じ、四月二四日、五の両日開催」された理事会で以下の決議文をテネシー州ナツシユビル市、南メソヂスト教会伝道局ピンソン総事に伝送し、之をヒューズ國務卿に伝送せられん事を乞ひたり」。「関西理事会ハ、日本当局ト北米合衆国トノ間ニ存スル歴史的友誼ヲ保存セシムルヲ誠心希望スルモノナリ」と。<sup>(90)</sup>

【注】

\* 本稿(上)で予告したタイトルは「太平洋問題調査会」であつたが、より内容を明示するために「日米関係委員会と太平洋問題調査会―洪沢栄一と神崎驥一―」と変更した。日米関係委員会は、洪沢栄一が一九一六年に発足させた会議体である(片桐庸夫『民間交流のバイオニア 洪沢栄一の国民外交』藤原書店、二〇一三、三九五頁)。また、「軍事教練反対運動」も同主旨から、「軍事教練反対運動と社会科学研究会」と変更した。

(35) 『関西学院 高等商業学部二十年史』七七頁。河上丈太郎は、東京帝国大学の新人会に所属し、関

西学院の教員となった松沢兼人、新明正道、坂本勝とともに吉野作造から影響を受け、ともに関西学院時代は「関西学院グループ」として労働学校や政治研究会で活躍したが、その関西学院就任は一九一八年である。河上の「妻はメソヂスト教会第三代目監督平岩愼の娘」であり、この就職を仲介したのは河上の立教中学校時代の恩師で、当時関西学院中学部の野々村戒三であった(『私の履歴書』一九六一、日本経済新聞社、二二二―二四頁)。なお、河上の信仰と思想形成については、中村和光「河上丈太郎の信仰と思想形成についての一考察―関西学院教授時代―」(『関西学院史紀要』二二一―二二五頁、二〇一五年)を参照のこと。

(36) 『関西学院 高等商業学部二十年史』年表、二二頁。

(37) この講義のタイプ原稿は、関西学院学院史編纂室に所蔵されている([S/2/0])。他に、本編纂室に所蔵されているオゾリンのシラバス原稿には、以下のものがある。An Introduction to English Poetry: A Syllabus of Talks on the Elements of English Poetry, delivered at the Kansai Gakuin College during the Spring Term of 1919, 32pp. ([S/2/0]) (池田裕子「関西学院のラトヴィア人教師イアン・オゾリンとその教え子・曾根保と由木康」『関西学院史紀要』第一七号、二〇一一、六八頁)。なお、このオゾリンの本講義のタイプの邦訳(未公刊)については、同室総合主幹池田裕子氏による邦訳を一部加修正のうえ利用させていただいた。ここに深く感謝いたします。なお、その邦訳に際して、池田氏が利用された各作家の邦訳は、以下の通りである。

- (a) 『草の葉』(下)、ホイットマン作、酒本雅之訳、岩波文庫、一九九八年、二五六一―五七頁。
- (b) 『鎖を解かれたプロメテウス』、シェリー作、石川重俊訳、岩波文庫、改版、二〇〇三年、二四三頁。
- (c) 『ワーズワス・序曲』詩人の魂の成長』、ワーズワス作、岡三郎訳、国文社、一九六八年、二〇〇―四、四一―三頁。
- (d) 『ロバート・バーンズ詩集』ロバート・バーンズ作、ロバート・バーンズ研究会編訳、増補改訂版、国文社、二〇〇九年、四五六頁。

(e) 新共同訳『旧約聖書』「雅歌」第二章一〇―一二節。

(38) オゾリンはこれらの「価値の最初の『実体』は世界共和国である」として、「国際連盟」を「世界共和国」と位置づけたが、この「世界共和国」という用語について、同年六月の黎明会講演で東京高等商業学校(現・一橋大学)の福田徳三が理解し、批判した「国際連盟」観を読み取ることができる。福田によれば内村の「キリスト再現」「再臨」問題は「政治上においては国際連盟でヴェルト・ライヒ」「ユニヴァーサル・エンパイア：すなわち世界帝国」を実現しようと思っている。しなしながら：精神上の方面においてはヴェルト・ライヒを欲しいという念が、ヨーロッパ人キリスト教国民の頭にはどうしてもある。宗教上の世界帝国すなわち世界教会(ヴェルト・キルヒエ)を造るには、やはりキリストが出て来なければならぬ」(「エホバとカイザー」国本蘭明の第一義Ⅱ)一九一九年六月、『暗雲録』武藤秀太郎編、『福田徳三著作集』第十六卷、信山社、二〇一六、八九―九〇頁)。

このように福田は「キリスト再臨」がヨーロッパ人の間には「非常な力」をもっているが、日本人には「そんな事はほとんど理解が出来ない」が、「在来少しもそういうような伝説の無い日本人でさえ、共鳴し得るような強い力をそこに持って「おり」：この運動は決して軽々に看逃すことはできない」。というのは、「近来、内村鑑三先生が盛んに唱えられたる所のキリスト再臨問題」が日本でも「余程沢山の人を動かしつつある」からであり、それはヨーロッパでの運動と軌を一にしており「これは決して偶然ではないと思う」(九〇頁)と福田は考えたからである。

さらに、福田はこのような世界教会の基礎となっているヨーロッパの国家成立に比して、「我が邦のこの国家自足経済はスペイン、フランス、殊にイギリスのその進撃的であつたと正反対に、防衛的国家自足経済」(「エホバとカイザー」とよりの解放Ⅱ 国本とデモクラシーに関する管見の一部、未完稿」一〇六頁)であった点を挙げて、このようなヨーロッパの国家観は「日本における国家という考えとは、根本的に違う」(「エホバとカイザー」八八頁)と考えた。すなわち「ヨーロッパにおける国」は「一つの抵抗的観念ポレミカル・ノーション」つまり「喧嘩の間から起つて来た考え方」

であり、「その対抗者はヨーロッパの中世には…キリスト教会、…帝国…封建諸侯」があり、「国家」は「この三つの敵に打ち勝って」形成されたものであり、「昔のギリシヤで謂うポリス、ローマで謂うチヴィタスとは全然違って、争鬭的起源のものである」(八八頁)と福田は指摘する。その証拠の一つとして福田は、J・K・ブルンチュエリの『国家学』(二八七五―七六)の冒頭にある言葉を引用する。すなわち「ヨーロッパ人の頭には、国家というものは理想として世界帝国としたいという考えが初めからあつて、この考え方はどうしても脱けない。そうして已む得ずしてナシヨナル・ステートに固めておつた。そこで機会さえあればユニヴァーサル・エンパイア、ヴェルト・ライヒ、すなわち世界帝国を造ろう造ろうと思つてゐる。色々な運動がこの方に向かう。しかしてこの理想は必ずしも空想ではない。数百年後には達せられるであろう」(八九―九〇頁)と。その一例として福田はイギリスの League of Nations [Society] (1915) (アメリカでは、League to Enforce Peace (1915)) を挙げた。このような思想的・歴史的背景をもつ「国際連盟」について福田は「初めから徹頭徹尾冷かしておりますけれども、…今できない方がよいということよりも、日本人が余り随喜の涙を零し過ぎるから、目を覚ますために言つたのであつて、…大勢は、どうしても軽く視ることはできない」(九二頁)と福田は注視していた。

なお、福田は「マーカンティリズム」について、「必ずしも「イギリスのように」進撃的たることを必然とせぬ。その本質は…国民経済の完成ということ」である点から考えると「徳川時代は封建時代にあらず、大体においてマーカンティリズムの時代であり」、そのような「防衛的国家自足社会」であつた「徳川時代の日本は「イギリスに次いで」第二の世界無比に理想的なる典型である」と考えた(「エホバとカイザー」とよりの解放」一九一九年七月、福田徳三前掲書、一〇六頁)。

(39) 本書は一八五五年の初版以降、五五年、五六年、六〇年、六七年、さらに七一年から七二年、八八年に印刷され、九一年から九二年の版が“deathbed edition”とされている。オズリンはC・W・サルビー博士による『タイムズ』の付録を使用した。

- (40) *Portraits of Robert Browning* (1938) の著者で第一回岡倉「由三郎」賞受賞者である曾根保は、関西学院高等学部英文科に一九一九年四月入学したが、その新人生歓迎会で、京都帝国大学文学部卒業で英文法担当の池田多助が、和訳されたブラウニングの「天使と少年」(正しくは、「The Boy and the Angel」である)を読んだが、曾根はその名前をA・テニスとともに知ってはいたが、その詩にクリスチャンである曾根は「軽い宗教詩」を感じて、人となりや他の作品についても知りたいと思った(曾根保『ある英語教師の記録』口述記録、発行者曾根翼、一九八二、一三三頁)。曾根は第二啓明寮で「すぐ隣にお住まいで」舎監であった池田を「その晩」訪問した。さらに、正門前にあった古書店「土屋」で原書を「一円五十銭ぐらい」で入手した。当時の関西学院では、ブラウニングをカナダ・メソヂスト教会宣教師「ウスワス」[H・F・ウッズウォース]が講読し、ブラウニングをオゾリンが四年生に教えていたが、三年の曾根は許可を得て出席した(前掲書、一一三―一四頁)。その寮で学生生活の四分の三を過ごした曾根は、残りの四分の一を舞子で「十六ヶ語の言葉が話せるという」オゾリンと過ごした。そこで曾根はドイツ語を学んだこともあったか「在学中首席」であった(池田裕子前掲論文、七〇―七三頁)。また、京都帝国大学厨川白村教授(一九一六年講師、一九九年教授)の「ブラウニングの詩の注解英語」を『英語青年』で読んでいた。
- ところで、ブラウニングは、C・ディケンズ、C・ダーウインらとともにユニテリアン牧師で婦人参政権に賛同したコンウェイ(Moncur Daniel Conway)らと交わっているが、曾根は *Portraits of Robert Browning* の中で、コンウェイに言及しているD・A・ウィルソンの論考 'How Browning had won His Wife.' を収録している(九六―九九頁)。

なお、土佐の民権運動家馬場辰猪は、コンウェイに師事し、彼が牧する(一八六四―八五)ロンドンの South Place Chapel を何度も訪ねている。

- (41) 池井優「日本国際連盟協会―その成立と変質―」『法學研究』(慶應義塾大学)第六八巻第二号、一九九五、二七、三一頁。なお、国際連盟協会の一九三一年四月一日現在の会員数は、学生会員六、

四二〇名であり、早稲田大学、東京帝国大学、慶應義塾大学、中央大学、明治大学、立教大学、青山学院、法政大学、東京文理大学、東京商科大学・同予科・同専門部、東京外国語学校、専修大学、東洋大学、拓殖大学、横浜専門学校、同志社大学、関西大学、京都帝国大学、関西学院、古屋女子英学塾「古屋登代子『苦闘十年』一九二六」、神戸女学院、大阪外国語学校、和歌山高等商業学校（以上、関東および関西連合会所属）であり、連合会に所属していない学校には、横浜高等商業学校、長崎高等商業学校、神戸商科大学、東京女子大学ら二二校が入会している。そこには東亜同文書院、京城帝国大学、台北高等商業学校ら植民地の学校も含まれている。その他、地方支部としては、愛媛、香川、大阪、鳥取、島根、名古屋、神戸、京都、茨城、和歌山、長崎、長野、青森、千葉、埼玉、宮城が含まれている（デジタル版『渋沢栄一伝記資料』三七卷三五六頁）。また、渋沢の民間外交の包括的な研究として片桐庸夫前掲書『民間交流のバイオニア 渋沢栄一の国民外交』を参照のこと。また、片桐庸夫『太平洋問題調査会の研究―戦間期日本PRの活動を中心として―』（慶應義塾大学出版会、二〇〇三）も参照のこと。

(42) 『開校四十年記念 関西学院史』一九二九、一五二頁。

(43) 以下の関西学院支部の初期の活動記録については、『高等商業学部史』（一一―一二頁）を参照のこと。

(44) 田川大吉郎は、長崎外国語学校で中国語を専攻し、一八九〇年、東京専門学校を卒業後、日本組合基督教会牧師綱島佳吉から受洗。郵便報知新聞社に入社、九二年都新聞社に移り、日清戦争に通訊官として従軍後、台湾新報社にも勤務した。日露戦争でも通訊官として従軍。一九〇八年の第一〇回衆議院議員総選挙で、始めて当選。一九〇八年から一四年まで東京市助役。一七年、元老山県有朋批判論文「方法を知らぬ民」が新聞法違反有罪、収監された。二〇年から石橋湛山を助けて『東洋経済新報』に小論評を投稿し、太平洋研究会を組織し、軍備縮小同志会を結成した。二三年に日本基督教連盟常議員に就任し、二五年に明治学院大学総理に就任した（日本キリスト教歴史大事典編集委員会『日本キリスト教歴史大事典』教文館、一九八八、八三二頁）。同志社英学校で学んだ綱

島もカルフォルニア州の日本人土地所有禁止法の問題解決に尽力したし（同、八八八頁）、その同志社で教鞭をとったS・L・ギューリックもまた「反」排日運動の指導者であった（巖原俊洋『アメリカの排日運動と日米関係―「排日移民法」はなぜ成立したか―』（朝日選書、二〇一六、一〇九頁）。青木節一は一九三〇年には国際連盟東京支局長の職にある（『高等商業学部史』二〇四頁）。

(45) 『高等商業学部史』（講演会一覽）では「近代外交の理想」となっているが、『開校四十年記念 関西学院史』（一五九頁）では「近代外交の真相」となっている。その内容の記録は現時点で見えていない。

(46) 井上琢智・高橋正・比留井弘司「人びと 一〇 乾精末」（『関西学院史紀要』第十一号、二〇〇五）。乾は国際連盟が平和運動に果たすべき役割に注目し、留学中からアメリカ平和協会の運動に関与し、同協会本部の講演者として、世界をまたにかけ、講演した。また、在米日本人会書記長を務め、その後任が神崎驥一である。なお、岩本によれば、乾の日本国際連盟協会の機関紙（『国際連盟』↓『国際知識』↓『外交評論』）への投稿は、第一期（一九二〇―二五）に四編、第二期（一九二六―三一）に五編、第三期（一九三一―三七）に投稿はなく、第四期（一九三七―四三）には二編である（岩本聖光「日本国際連盟協会―三〇年代における国際協調主義の展開―」『立命館大学人文科学研究所紀要』第八五号、二〇〇五、一一九頁）。なお、「人びと 一〇 乾精末」では、『国際知識』への投稿論文「精神的軍備撤廃と国際連盟」（第三卷第八号、一九二三）、「通商衡平待遇の問題」（第四卷第二号、一九二四）、「関税会議継続可否論」（第六卷第七号、一九二六）のみ掲げている。彼については、彼的全著作を把握した上で別稿が必要であろう。さしあたり、Masako N. Racel Inui Kiyosue: A Japanese peace advocate in the age of "yellow peril". (*World History Bulletin*, Sep. 22, 2015) を参照のこと。なお、日清・日露戦争前後の「黄禍論」については、井上琢智「添田寿一と日清・日露戦争―*Economic Journal* 宛公開書簡等に見る外債募集と黄禍論―」（『甲南会計研究―庭本佳和先生退職記念号―』No.九、二〇一五年三月）をも参照のこと。

(47) 翌日の一四日『神戸新聞』（神戸大学経済経営研究所、神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ『新聞記事文庫』）を参照のこと。田村市郎は、一九二〇年、関西学院高等学部商科を卒業後、三井銀行を経て二二年六月高等商業学部専任研究員となり、二三年に講師となり工業政策を担当していた（前掲書『増補改訂版 関西学院事典』三三二頁）。

(48) 国際連盟協会関西学院学生支部の発会式は、『開校四十年記念 関西学院史』年表では「二八日」とされ、『高等商業学部史二十年史』年表では「二五日」となっている。なお、国際連盟協会関西学院支部の活動詳細を記した資料に「創立十周年抄史」（『恒平』第六号、一九三三、一〇一—一九一頁）と『国際問題研究部三十年史 上』（一九五三）があり、その引用出典は主として『高等商業学部史二十年史』である。また、この「抄史」には関西学院学生支部の活動だけでなく、関西連合委員会等のそれをも記述している。なお、創立時直後の『学院時報』学院史編纂室所蔵の第一二二号（一九二四年一月二十五日、第二二二号の三一六頁は欠落のため確認できない）。

(49) 『高等商業学部二十年史』一六四頁。左海猪平は関西学院高等商業学部一九二二年四月に赴任し、法律学、商業地理の担当であった（同書付録「現職員一覧表」一三三頁）。彼には「法の拘束力の質的根拠に關するくらつべの學說」（『商光』）（『関西学院』二（二）、四六一—五四頁）がある。なお、『商光』および彼の他の論文については、丸茂新「関西学院創立百周年記念特別号の発刊に寄せて」（『商學論究』二（三七）（一・二・三・四）合併号）、P. 23、一九八九年一〇月）を参照のこと。

(50) 「一九二四年排日移民法成立の年、新渡戸は国際連盟事務次長としてジュネーブにあった。その年の暮に、短期帰朝しているが、彼は排日法が撤廃されるまでは、二度とアメリカの土は踏まないという、かねてからの主張を實踐した」。「彼は絶対平和主義信仰とするキリスト教のフレンド派：妻メリーもフィラデルフィアのフレンド派教徒の：出身」で、「アメリカのキリスト教団体も、移民の制限は認めても、人種による差別的排除には強く反対していた」（三輪公忠『「人道主義」の名において反撥した日本—新渡戸稲造を中心として—』（三輪公忠編著『日米危機の起源と排日移民法』

論創社、一九九七、二九七頁）。なお、本稿（上）「新渡戸稲造」（二二―二五頁）を参照のこと。

新渡戸は「二月に東京に帰国し、二ヶ月後ジュネーブに向けて離日した。：帰国中、彼は早稲田大学で講演し「二月二〇日」、アメリカの排日移民法を批判し、同胞を人種主義的に辱しめている国へは、誰の招待があるかと、二度と足は踏まない、と公言した」（三輪公忠編著三輪掲論文、三〇四頁）。なお、翌年一月二十九日には関西学院でも講演している。本稿「前」の注二一を参照のこと。

(51) 『開校四十年記念 関西学院史』 一五二頁。

(52) 『高等商業学部二十年史』 一一二頁。

(53) 『高等商業学部二十年史』 一六五頁。外務省の勅任参事官として、ワシントン会議に参加した林は一九二三年から三三年まで慶應義塾塾長兼大学総長を兼務していた（『慶應義塾史事典』慶應義塾大学出版、二〇〇八、七二五―二六頁）。

(54) 『高等商業学部二十年史』 一六五頁。

(55) 『開校四十年記念 関西学院史』 一六一頁。なお、日米協会は一九一七年、金子堅太郎を初代会長とする日米民間交流団体であり、激動する国際情勢の中、日米両国の有識者たちによって創立された日本でもっとも歴史と伝統のある日米民間交流団体であり、現在も活動を続けている。なお、金子はアメリカ留学から帰国（一八七八）後、小野梓、馬場辰猪が主催する「共存同衆」に属した。「共存同衆」については、さしあたり井上琢智『黎明期日本の経済思想―イギリス留学生・お雇い外国人・経済学の制度化―』（日本評論社、二〇〇六）第三章を参照のこと。

(56) 『高等商業学部二十年史』 一一四―一五頁。この評価は、関西学院神学部卒業生で当時関西学院礼拝主事であった柳原正義のものである。この松本の「世界的理想主義」思想の源泉を探ることは今後の課題としたい。おそらく新渡戸の影響に加えて、オゾリンの「世界共和国」等の思想の影響も考える必要がある。本稿注三八を参照のこと。なお、松本の遺稿には、「白色と有色」「日本現代の要求」「国民の試練」「太平洋の文明と日本の使命」がある。

(57) 『高等商業学部二十年史』一六六頁。なお、神崎の支部長就任については、本稿注一〇六（本稿下）を参照のこと。支部長となった神崎驥一は、一九二五年六月三〇日から七月一五日までホノルルで開催された第一回太平洋会議に「神戸関西学院高等商業学部長」として出席したが、この会議に「近江八幡西遊幼稚園園長」としてW・M・ヴォーリズが妻満亀子とともに出席している（山岡道男『太平洋問題調査会』研究）龍溪社、一九九七、二四頁）。なお、このヴォーリズ夫妻のこのハワイ会議への出席については、玉岡かおる『負けんときーヴォーリズ満喜子の種まく日々』（新潮社、二〇一一、下、二一四―二二頁）も参照のこと。アメリカYMCA同盟総領事で同会議の主催者の一人で、一九四六年のノーベル平和賞受賞者となったジョン・モット（John R. Mott, 1865-1955）はコロラド大学時代のメレルの恩師であり、交流が続けられていた。

この会議への出席者とそのテーマとを相談する「太平洋問題研究会」が東京帝国大学構内山上御殿で開催（同年三月二六日）されたが、乾精末も参加している（山岡道男前掲書、二二六、一一二―一三三頁）。また、第三回打合せ会（六月九日）で決定された部門分属の「第三部 人種、人口」の担当として神崎驥一とヴォーリズ満亀子が参加し、「政治関係（移民問題を含む）」の担当者として神崎が参加し、神崎は新聞係、満亀子は接待係となっている（同書、一一七―一八頁）。

一九二九年一〇月二八日から一月九日まで京都で開催された第三回太平洋会議への神崎の関与は、山岡の著書からは伺えない。ところで、この太平洋会議は当初「各国のYMCA運動の一環」と捉えられていたため「産婆」の役割を担ったが、「太平洋問題が国際政治の重要課題となるに従って…出席しなくなっていく」（同書、五一頁）。この会議の名称については、同書二二頁を参照のこと。

(58) 岩本前掲論文、一一九頁。岩本は彼を支流派に分類している。

(59) 『高等商業学部二十年史』一六三頁。戦後の朝日会館（現・フェスティバル・ホール）最初の館長であった十河巖には同窓の画家吉原治良を書いた「日本前衛美術の開拓者吉原治良が国際路線にのるまで」（『日本美術工芸』第三一五号、一九六四年二月）、『宣伝の秘密―サントリー宣伝物語』（一九六六）、

『名優雀右エ門女房おしかの一生』（一九七四）、『あの花この花』朝日会館に迎えた世界の芸術家百人（一九七七）などがある。なお、二〇一八年七月、十河の遺品が関西学院大学博物館へ寄贈された。

(60) Richard Nikolaus Eijiro Coudenhove-Kalergi (1894-1972) は、クーデンホーフ家とカレルギー家が連携した伯爵一族クーデンホーフカレルギー家の一人で、東京生まれのオーストリアの国際的政治活動家。汎ヨーロッパ連合主宰者。日本人名の幼名を持ち、その名は、青山栄次郎で、母は青山光子である。彼は汎ヨーロッパ主義（パン・ヨーロッパ主義）を提唱し、それが後世の欧州連合構想（EU）の先駆けとなった。そのため欧州連合の父の一人に数えられる（前掲書『岩波 世界人名大事典』七八四頁）。なお、「校内研究会の興味の焦点はクーデンホーフフェンの唱へた『汎ヨーロッパ』であったという（『高等商業学部二十年史』一六六頁）。この時期の関西学院学生支部の中心人物の一人が十河巖であった（注五九参照）。

(61) 一九二七年の「ジュネーブ国際経済会議」開催前に、国際連盟は規約第二三条（e）で「交通および通過の自由ならびに一切の連盟国の通商に対する公平な待遇を講べし」との規定によって第一次世界大戦後の国際経済体制を再構築するためにジェノバで「国際経済復興会議」が開催され、輸出入禁止制限の漸進的な撤廃、輸入制限を行う場合には関税のみで行うこと、互恵制度に基づき最恵国条項を可能な限り含む貿易条約の締結を通じて国際貿易関係を回復させることが勧告され、翌年には「関税手続き簡素化に関する条項も、「速やかに右禁止制限を最小限に減ずるための措置を實行することが決定された。ここでの「関税問題」はこのことを指すのであろう。林正徳「国際連盟のもとでの貿易ルール形成」（弦間正彦（統括）『早稲田大学 地域地域間研究機構、二〇一四年報告書』一三一―一四頁）を参照のこと。

(62) 『国際知識』第五卷第六号、五一―五七頁。この論文は国際連盟のクーデンホーフカレルギーの「汎ヨーロッパ連合」構想への批判であろう（注六〇を参照のこと）。なお、山岡道男は、この文献を「第一回ホノルル会議に関する参考文献」の一つに数えている（山岡道男前掲書、八三頁）。と

ところで、このように「思想言論の威力と人間の正義公正」を重視する神崎ではあったが、「有色民族が大部分を占むる太平洋」の「解放」には「先進国である日本が率先して骨を折る責任がある」とし、「八紘一宇」「大東亜共栄圏」思想の一步手前にいる。しかし、すでに指摘したように(二四頁)、一九三二年の「国際連盟脱退是非論」では、「アメリカ、欧州連盟に対して有色人種的意識に依つて連結せられる亜細亜同盟形成の観念が具体的に達成し兼ねないとも保証は出来ない」として、その後現実には生まれた「大東亜共栄圏」構想を危惧することとなった。

(63) 『高等商業学部二十年史』一六六―六七頁。石井菊次郎(慶応二―一九四五)は、日本の外交官、政治家。第二次大隈内閣で外務大臣を務め、国際連盟設立期には日本代表を務めた。信夫淳平(明治四―一九六二)は、日本の外交官、国際法学者。法学博士で早稲田大学教授。

(64) 関西学院内での懸賞論文(一九三〇年)中の当選論文、関本篤「学院の国際的使命を論じ学院連盟支部に及ぶ」、高橋純「国際正義と関税問題」、由良博「欧州大戦後に於ける列国対支援助を論ず」に対して、当時上海領事館附きの乾精末から贈られた「乾杯」が授与されている(『高等商業学部二十年史』二〇四頁)。

(65) 『高等商業学部二十年史』講演年表、六頁。

(66) 前掲論文「創立十周年抄史」一四〇―一四二頁。なお、和氣六郎は国際連盟協会本部の懸賞論文に「国際連盟と日支関係」と題した論文を応募し当選し、阿江伸夫の「国際連盟と日本の将来」は佳作となった。審査委員は新渡戸稲造と山川健次郎であった(一三九頁)。

(67) 『恒平』第五号、一―四頁。

(68) 『恒平』第五号、五―七頁。

(69) 『恒平』第五号、八―二頁。原田脩一は、一九二一年、関西学院高等商業学部卒業後、アメリカ州立インディアナ大学、コロンビア大学に留学し、日本の労働問題をテーマでP.D.を取得し、一九二八年高等商業学部教授に就任した(前掲書『増補改訂版 関西学院事典』三九〇頁、前掲書『高

等商業学部二十年史」「現職員一覽表」一三三頁。

原田が「宗教団体特に人類愛を其の基調とする基督教すらも此の問題に対しては何等批判的態度を示してゐない」と指摘しているが、一九三七年一月六・七日に関西学院で開催された英文学会で、旧制関西学院大学法文学部教授であった壽岳文章は神戸女学院の協賛を得て「英語聖書展」を「英語聖書の各版」目録を自ら作成し開催したが、それは「聖書を選んだことに平和の願いをこめて、一つの resistance でもあった。ところが、身をキリスト教プロテスタント系の学校に置きながら、大会の名において、英米二国に対し、日本の国策の正しさを声明する決議文を送ってはどうかなどと言いだす会員もあり、私をうんざりさせた。もちろん、市河三喜博士をはじめ、会の長老たちは、誰一人そんな動議をとりあげようとしなかった」こともその一例であろう（壽岳文章「思出を一つ二つ」『日本英文学会五十年史』一三三頁）。なお、壽岳の平和論については、中島俊郎「文化遺産としての向日庵―過去を見つめ、未来を見ずえる『開かれた場』―」（『甲南大学総合研究所叢書』一三三、二〇一八）の「壽岳文章と戦争」（三六一―三七頁）を参照のこと。

(70) 前掲論文「創立十周年抄史」一七五頁。一九三二年、大江素天（一八七六一―一九五〇）は「満洲行進曲」を作詞している（作曲、堀内敬三）。また、『京都大学経済学部八十年史』（一九九九、二六七頁）によれば、作田莊一は一九三一年一月三〇日から三二年九月一四日まで同職にある。三九年には、満州建国大学副総長兼研究委員長となっている。

(71) 前掲論文「創立十周年抄史」一七七―七九頁。

リットン調査団は一九三二年一〇月二日に報告書を世界に公表した。報告書は、満州事変の発端となった柳条湖事件での日本軍の行動を「合法なる自衛の措置」とは認めず、また満州国については「純真且自発的な独立運動に依り出現したもの」ではないとした。他方、中国の「無法律状態に依り他の何れの国よりも一層多く苦しめた」ことが紛争を誘発しとして中国側の責任をも認めた。このように「日本の排他的覇権を否定する一方、顧問に日本人を優先的に任命することなど

日本の優先的地位を認めて、日本が国際連盟と妥協することを期待するものであった。このように、リットン報告書は必ずしも日本に全面的に不利なものではなかった。しかし、リットン報告書がこの事件を軍部の侵略行為と断定し、満州国不承認されたものとして軍部はこれに強く反発し、国内にもそのように宣伝した。さらに国際連盟の一月二十四日の総会で同報告が採択されたため、松岡洋右代表が連盟総会を退場し、翌年三月二十七日脱退を通告した（『日本史大事典』平凡社、第六巻、一九九四、一一二―一三三頁）。

(72) 前掲論文「創立十周年抄史」一八二頁。スラッシュは改行を示す。「当時社会情勢の一端としては、古屋女子英語塾の「支部」解散は大朝「大阪朝日」に発表され関西愛国学徒連盟は各支部に解散を迫つて来とか、或は至る所に連盟打倒の演説が行はれ：我々研究団体もや、もすれば誤解されんとする形勢が濃厚であつた」と指摘している（同論文、一八三頁）。この関西愛国学徒連盟は、おそらく「軍部支援の下に今秋「一九三二」盛大なる愛国祭挙行―関西思想界に彗星の出現愛国同盟の大旋風―」した運動の一種であり、大阪愛国学生連盟の中心は関西大学法学部学生藤田藤一（『神戸新聞』一九三二年七月二十九日〈神戸大学経済経営研究所 新聞記事文庫、思想問題〉）であった。彼はこの組織を「どこまでも純真果敢なる学徒の立場に立脚した運動」体であると述べている。

(73) 前掲論文「創立十周年抄史」一七九頁。また、これらの活動記録については前掲書『関西学院大学国際問題研究部三十年史 上巻』（改称については一七頁）を参照のこと。

(74) その後、一九四一年になると、学生会が解散され報国団と改組されたため、関西学院報告団文科部研究科国際問題研究班と組織変更され、四五年には、関西学院大学国際問題研究会として再開された（『増補改訂版 関西学院事典』二〇一四、一八二頁）。この改組のために、機関誌『恒平』は一九四一年刊行の一三号で終刊となった。神崎は「恒平終刊の辞」を書き、「本誌が国際問題研究機関たるの使命を維持し」、「学生を中心とする研究の機関たる特徴を維持」することを求めた（一二頁）。なお、『恒平』に掲載された諸論考を追跡することで、関西学院における平和運動の隆盛

から衰退までを明らかにできるであろう。

それにもかかわらず一九四二年、改称された国際問題研究班として第一四号が出版された。その巻頭には『大阪毎日新聞』の記事「わが陸海軍部隊／米英軍と開戦す／今暁西太平洋で」を載せ、「正義と真理に適う原理に立脚する国家民族は必ず世界を支配し人類を指導する事となる」（神崎驥一「世界史的大転換期に臨む学徒の使命」と宣言し、学生には「之新旧秩序交代の過渡期に発生する各種の複雑困難なる現実の問題を整理する合理的方策を考究する事も亦学徒の任務なり：今日の青年学徒は此の人類史上最重大なる転換期に生れて居る事の意義と光栄を深く自覚すると共に時代の要望に応ゆる一大奮起」を求めた。ここに至って関西学院の平和運動は大きく「翼賛」へと転換することとなった（扉、一一二頁）。

なお、「日本国際協会関西学院支部」と改称して（一九三三年六月一日）以降、一九三九年末までの活動については、『国際問題研究部三十年史上』（一七―二七頁）を参照のこと。ただし、本資料は、一九三九年末までの活動記録であり、現時点では同誌統編の発行は確認できていない。国際問題研究部は、戦後の一九五八年六月に『恒平』を二一号として復刊し、恒平クラブ会長、大阪市教育委員長「神崎は、「恒平出版にあたりて」を寄せ、「学生の手によりて作られた国際平和に関する機関誌的なものは戦前以来多種多様であります、終始一貫今日迄引続き出版されて居るのは：本誌『恒平』只一つのみ」とし、「平和に対する理想主義者には最大の忍耐力を要望し：不屈不撓の強い意志とそれを挫折せしめない不退転の忍耐力を持ち続けて欲しいと希望し」、「日本人には従って青年に於ても、烈しい情熱の火は燃え上がるが、線香花火的になる可能性」を危惧し、「人類最大の理想の実現のため粘り強い忍耐力を発揮して人類平和のため徹底した貢献を継承してほしい」（一一二頁）と結んでいる。この号には日本国連協会会長で元国連大使の佐藤尚武も「観光日本を想う」を寄稿している。

『恒平』一四号から二二号までの出版状況は今のところ不明である。関西学院創立七〇年を記念

して発行した『恒平』第二二号（一九五九）は、「神崎先生を偲ぶ」を特集している。この号には森田嘉一「国際平和と世界恒久平和を悲願としていた国際問題研究班の一班員としての回想」が掲載されている。森田は一九三八年五月から『恒平』「発刊一五周年記念号」（一五号、一九四三年七月五日。なお、一四号には一九四一年二月二五日に配布されている）までの編集・検閲の過程を書いている（八五―九二頁）。

その中に『恒平』の本記念号の発行のプロセスを伺うことができる。それによれば、兵庫県特高課に原稿検閲依頼し（一九四二年一月二八日）、翌年一月一四日に同課より原稿を受領し、一日に掲載予定の酒井正三郎「経済構造変化の理論」（この年、「国民経済ノ構造変動ノ本質並ニ原因ニ関スル研究」により、東京商業大学から経済学博士号が授与された）の原稿を西宮特高課へ持参、二月二日に西宮特高課から『恒平』原稿受け取り、六日に兵庫県特高課から『恒平』原稿検印を受け、八日に西宮特高課から『恒平』公刊許可を得ている。このように原稿提出から公刊許可まで四二日を要している。

(75) 池井優前掲論文、四四頁。

(76) 「神崎先生が…学院支部の為に国際問題に関する文庫設立の意を漏らされてから数年経て…最近急速に…進捗して今や完成されんとして居る」。「恒平と云ふ文字が何処からきたか？恒久平和の意であることは勿論であるが、…数年前神崎先生の御令息恒平さんが幼くして亡くなられた。その記念として…支部の為に若干の金を以て国際平和、国際問題に関する文庫を設立し度いと云ふ先生の創意に基くもの」であった。「亡くなられた恒平さんと太平洋会議と密接なる関係がある…先生が平和の使徒として布哇ハッパイの大会に赴かれる時にお生まれなつたが故に、恒平」と名付けられたとか？」「昨秋の神崎先生の御夫人「美津子」の御逝去に依つて、…支部の為に間接的に非常なる御援助を為して下さつたその方の一つのメモリーとして！である」と（大石兵太郎・原田脩一・中島猶次郎司書「恒平文庫について」『恒平』第三号、一九三〇、九四頁）。なお、この点については、前掲

書『開校四十年記念 関西学院史』（一九四頁）、『関西学院大学図書館史一八八九年～二〇一二年』（二〇一四、一一、三三頁。）を参照のこと。この「恒平文庫」は「委託図書制度」を用いたものである。なお、『部報』が「恒平」と改称されたのは、この三号からである。また、この「恒平文庫」については、「恒平文庫設立の趣意」（『恒平』第三号、一九三九四頁）があり、一九三三年一月九日に結成された「恒平倶楽部」は「恒平倶楽部通信」を刊行している（『国際問題研究部三十年史』十九頁）。なお、一九五四年発行の「恒平倶楽部名簿」が学院史編纂室に所蔵されている（[K33/9]）。また、中島は関西学院図書館の第二代の司書で、同志社普通学部卒業後、関西学院神学部に学びながら、図書館に勤務し「第二次世界大戦前における図書館員養成や図書館経営の先駆者」となった。詳細は前掲書『関西学院大学図書館史』（二八二～二八八頁）を参照のこと。

(77) 国際連盟協会関西学院学生支部「創立十周年抄史」一四〇頁。ここでは、第二号の原稿を募集している。

(78) 『関西学院百年史 一八八九・一九八九』通史編Ⅰ、一九九七、五五〇頁。発禁となった理由は、同論文が「日支事変」が『東亜新秩序建設ノ為に遂行サレツ、アル聖戰』であることを十分に認識されていないというものであった（傍点は井上による）。

(79) カリフォルニア大学 (University of California) は、アメリカ合衆国カリフォルニア州バークレーに本部を置くアメリカ合衆国の州立大学で、一八六八年に創立された。そのバークレー校 (University of California, Berkeley) は、カリフォルニア大学の発祥地であり、一〇大学からなるカリフォルニア大学システム (UCシステム) の中で最も古い歴史を持つ大学であり、ハーバード大学など同国東部の名門私立大学群の集まりである「アイビーリーグ」に対する名門公立大学の集まりである「パブリック・アイビー」の一枚である。

(80) 神崎驥一「履歴書」（一九三四年三月二九日付の履歴書であることから考えると、同年四月一日の関西学院大学開設のための履歴書であろう。学院史編纂室保存 [AB45]）。神崎は在米日本人会書記長辞任後の一九二二年三月二八日、関西学院高等商業学部長に就任し、二三年一月同学部「経

済学教員トシテ文部大臣ノ認可ヲ受」けた。また、神崎が在米日本人会書記長に就任した一九二五年当時の日米日本人会会長は「ポテトキング」と呼ばれた牛島謹爾（就任は一九〇八年である）であった（山田義雄『花は一色にあらざーアメリカで「ポテトキング」と呼ばれ日本人の心を伝えた牛島謹爾―西日本新聞社、二〇〇八、三三七）。なお、同会は、従来の「連合議会代議員解散」を受けて結成され、その初代会長が牛島で、書記長は久馬俊泰であった（在米日本人会事蹟保存部編集『在米日本人史』（一九四〇、九一頁。その死去については一一四頁。国立国会図書館デジタルコレクションで本書を利用した）がある。なお、神崎夫人澄江は「当時の在米日本人会会長の（通称ポテト王）牛島謹爾迅に招かれて同会の書記長になった」と回想している（「夫驥一のこと」『恒平』三六・三七合併号、一九七三年一月、一一七頁）。

- (81) 蓑原俊洋『カリフォルニア州の排日運動と日米関係―移民問題をめぐる日米摩擦、一九〇六―一九二一―』（有斐閣、二〇〇六、三二―三四頁）および蓑原俊洋前掲書『アメリカの排日運動と日米関係―「排日移民法」はなぜ成立したか―』（第一部）を参照のこと。この一九二〇年一月二日に第二次排日土地法案が州民の直接投票に付され、反対が賛成の三倍の多数で可決され、一月九日州法として施行された（同書、一二三―二五頁）。このような状況下であって、一月一八日、福田徳三は神田青年会館で「アメリカの排日問題について」を講演し（金沢幾子『福田徳三書誌』日本経済評論社、二〇一一、七一―頁）、「排日問題につき政府の対米態度の不当性を糾弾し輿論を喚起すべく、…三宅「雪嶺」、吉野「作造」らと講演会を開く（「黎明会亦起つ」『読売新聞』一月七日）金沢幾子前掲書、一八五頁）。

この移民法成立後、再び、アメリカの排日運動が激化したのは、一九二五年年一月二日八日になって、関東軍司令官白川義則が張作霖・郭松齡両軍に満鉄付属地付近の戦闘禁止を警告したためであった（『近代日本総合年表』第三版、岩波書店、一九九一）。

- (82) カナダ・メソヂスト教会宣教師G・ミーチャムから洗礼を受け、一九一〇年五月一八日、カナダ・

メソヂスト教会の関西学院経営に参加し、同教会から選ばれた理事四名の一人となり、合同経営後第一回の理事会で第三代院長に選出されたが辞退した（『増補改訂版 関西学院事典』二〇一四、三一―三二頁）。江原の平和運動への関わりの一つに、一九〇六年設立された「大日本平和協会」（排日運動の中心的役割を果たしていた同志社で教鞭をとっていたS・L・ギューリックも参加した）がある。「これ『大日本平和協会』により、カリフォルニア州において以前と比べ効果的に排日土地法の強化運動の愚かさを州民に訴えることが可能となった」（袁俊洋前掲書「二〇一六」一〇九頁）がある。

同年三月一四日、東京神田のYMCAで在日外国人宣教師を中心とする「在日米人平和協会」により広く日本人を結集した会を結成することとなり、一九〇九年まで、会長に就任していた（後継者は大隈重信）。同協会の排日問題への取り組みと渋沢栄一が会長であった日米関係委員会設置については坂口満宏「国際協調型平和運動―『大日本平和協会』の活動とその史的位罫―」（『キリスト教社会問題研究』、同志社大学、三三三号、一九八五、二二八―二九頁）を参照のこと。また、ギューリックの活動については、以下の文献を参照のこと。Daniels, R. *The Politics of Prejudice* (1962, pp. 79-83)。

(83) 『関西学報』第一六号、一九一三年七月。

(84) 本文には漢字に平仮名のルビが多く振られているが、ここでは省略した。なお、引用文中現在では差別語とされる用語が用いられているが、歴史的的文章であることを考慮し、原典通り引用する（本紙は、関西学院史編纂室の「神崎驥―バーチカルファイル」に保存されているが、その続編は保存されていない）。在米日本人会書記長の職は、すでに指摘したように一九一五年に神崎も就任し、二一年まで在職していた。このような両者の役割を考え、養原はKanzaki, Kiichi, *California and the Japanese*. San Francisco: privately published, 1921. 44-46 Inui, Kiyo Sue [Kiyosue], *The Unsolved Problem of the Pacific: A Survey of International Contacts, Especially in Frontier Communities, with Special*

*Emphasis upon California and an Anahyric Study of the Johnson Report to the House of Representatives.*

Tokyo: Japan Times, 1925 を参考文献に挙げている(箕原俊洋前掲書、101頁)。なお、乾は後者の単著により東京帝国大学より法学博士の学位が授けられている(井上琢智、高橋正、比留井弘司『乾精末』『関西学院大学史紀要』第一二号、二〇〇五、二九二頁)。

ところで、アメリカ大使 R・S・モリスは、幣原喜重郎駐米大使との会談(一九二〇年九月三〇日開催の第三回会議)で、この在米日本人会は日本人学校とともに日本人の「米化[Americanization]を妨げる大きな一因であったと指摘している(箕原俊洋前掲書「二〇一六」、一四六頁)。

(85) このベーツの発言が何時何処でなされたかについては、現時点では確定できていない。

(86) この「日米新年号」(六八七〇号)が、どの新聞のものであるかは確定できていないが、このタイトルから判断すると在日日本人協会の機関紙であろう(本紙は、関西学院史編纂室の「神崎驥一バーチカルファイル」に保存されている)。

(87) この時期の『太陽』の第五代主筆は同窓の浅田彦一(空花・江村・浅田は一九二二年九月二十六日に関西学院基督教青年会に入会している)は一九一七年から二三年まで同誌の主筆を務めていた。なお、『太陽』に関わった人物として、浮田和民(第四代主筆)、内村鑑三、平岩愼保(四女の末は河上丈太郎の妻である)、さらには『太陽』の英文版に深く関わったのは神田孝平の養子で英文学者の神田乃武であり、関西学院の先輩で児童文学者の久留嶋武彦(一九九三年、普通学部卒業)がいる。浅田については、さしあたり井上琢智「浅田彦一(空花・江村)」(『関西学院史紀要』第八号、二〇〇二)を参照のこと。関西学院の関係者で『太陽』への寄稿者は、神崎の他に、稲垣足穂、今東光、竹友藻風、永井柳太郎、山田耕作がいる(二八八―八九頁)。この『太陽』が発行された九月より二ヶ月前の七月五日に、永井柳太郎は「世界平和に対する所感」を商学会で講演している(『高等商業学部二十年史』「商学会講演・出版・役員年表」二二頁。なお、永井には『永井柳太郎氏大

演説集』(大日本雄弁会編、大日本雄弁会、一九二六)があるが、本演説は採録されていない。

(88) 単なる「風評」ではなく、一九一九年二月七日に実際に提案していた。

(89) 『母校通信』第四号「神崎先生送別号」一九五〇年五月、一頁(青木福太郎談)。第一回目の帰国は、一九一三年五月に開催された「第一回在米同窓会」が「神崎一時帰国の送別会」と「在米日本人会書記長就任の乾の歓迎会」であったことから分かる。他に畑歙三を含め六名も参加していた(井上琢智他前掲論文「乾精末」注二七、二九六頁)。なお、乾は国際連盟協会の機関誌「国際連盟」(後に、「国際知識」、「外交評論」と変更された)に合計十一論文を投稿している(岩本聖光前掲論文、一一五頁)。

(90) 前掲書『開校四十年記念 関西学院史』一五三頁。現在のところ、*Minutes of the Board of Directors, Kansai Gakuin* では確認できていない。

#### 【注(72)への補注】

関西学院におけるこのような恒久平和運動は、一般の学生にも影響を与えたと思われる。その一例として牧師大村善永を挙げることができる。カナダ・メソヂストのC・S・イビーと平岩愼保の甲府伝道でキリスト教から影響を受けた大村は、第六高等学校在学中に「網膜硝子体出血」により途中失明し、「奈落の底に突き落とされた」ものの、『点字毎日』を通じてヘレンケラー、岩橋武夫らの存在を知り、「絶望から希望へ」「死から生へ」「滅びから救いへ」と呼び返され、その岩橋の近所に下宿し、関西学院への入学準備をして後、一九二九年、最初は聴講生として関西学院文学部英文科に入学し、その後本科生となり、三三年卒業、横浜訓盲院に就職した。ところが、一九三七年に日中戦争が勃発すると、「横浜訓盲院の大多数が好戦論者であった」が、同僚の河原と真船とともに「大村は非戦論者として」の立場を取ったために、同院内で軋轢を生んだ。このような大村の反戦・恒久平和思想は、在学中に経験した満州事変を巡る関西学院における恒久平和運動から醸成されたと言えよう。なお、大村の長男の名前は「美国」である(室田保夫「大村善永研究ノート―その生涯と事績―」(『関西学院史紀要』一九号、一四―二二頁、二〇一三)。